
Monochrome lonely Wonderland

御坂 紫音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Monochrome lonely Wonderland

【Nコード】

N3810W

【作者名】

御坂 紫音

【あらすじ】

アリスは不思議の国にて、物語を作る事が役目。

何も代わらぬ日々の中彼女たちは全てををあきらめた。

アリスは、不思議の国の崩壊と引き換えに己の自由を手に入れることを望み

それを知った女王は悲しみ、

様々な思いが交錯する中兎も1つの行動をとる――

キヤスファイにて執筆しておりますものを、改正として書かせてい

た
だ
き
ま
す。
。

No.00

*

アリスは物語を作るのをあきらめて、バラバラになりました。
そんなアリス達をさがして兎達は、
モノクロタイルの上を跳ねるのです。

*No.00

触れてしまえば壊れそうなほど繊細な金髪に、硝子細工のような青い目。陶器の如くさわり心地のよさそうな肌の少女が、イスに腰掛けて退屈そうに足を揺らしていた。

身に付けられたレースがふんだんにあしらわれたワンピース。頭に付けられた、白いカチューシャ。足元は真っ赤な靴で齡にそれ相応の格好と、いえよう。

目の前のテーブルに並べられたティーセット。スプーンやフォーク、ナイフと共に置かれた一切れのフルーツケーキ。ティーカップの中に浮かぶ、琥珀色の液体の中に連続的に角砂糖を入れ始める。

白魚のような指で直接入れられる角砂糖。

少女——アリスはもったいぶるように、先の数ミリだけを紅茶につけて止める。そしてゆったりと指で押して沈め、すぐさま手を放す。

カップの中に波紋が広がり、ふちに当たって消滅する。

アリスは頬をほころばせると新たな角砂糖を投入して、波紋を生まみ出させた。

幾つか砂糖を入れると、金色のスプーンの端をつまんでかき混ぜる。時計回りに回転する紅茶にはとけきれない砂糖が、其処に沈殿していた。だが、アリスがスプーンをかき回すことにより浮かび上がり、紅茶と一緒にティーカップの中を泳ぐ。

音を立てないように丁寧に丁寧に混ぜ終わると、置いてあった場所にスプーンを戻す。

カップを持ち上げ液体に移る自分の顔を覗き込みつつ、アリスは微笑んだ。

綺麗にゆがめられた唇に、ティーカップの端を当てながら紅茶を口に含む。一口飲み干すと、受け皿に戻してお茶菓子へと手を伸ばした。

彼女が手に取ったのは宝石のような、色取り取りのジェリービーンズ。その中でも鮮やかな赤色を手にとって、愛おしそうに見つめ口の中に放り込む。

中に広がる独特の甘酸っぱさに満足げな表情を浮かべ、飲み込んだ。

「おいしい」

上品な仕草で頬に手を当てると、ティーカップを手にとって再度紅茶を唇につける。

「残念なのは、誰もお茶会に参加していないことかしらね」

アリスは年齢に見合わないほど、丁寧な物腰で言葉を並べていった。寂しげに目を細め、前方を見つめる。

上座には、誰も居ない。存在はしているがそれはもはや生きているものではなかった。

撒き散らされた鮮血。漂う異臭。そんな中で一人、アリスはお茶会をしていた。

「残念ね、兎さん。帽子屋さん。又お茶会開いたら来てくれるかし

ら？」

口に手をあて笑いをこぼすとアリスは紅茶を飲み干してケーキを切り取り始める。

柔らかく入るフォークに切断されたケーキの断面は、実に美しく運ばれてゆくカケラに乗ったフルーツも煌びやかだった。

切り取った一切れが小さかったのか、物足りない様子でフォークについたクリームを舐めとりつつアリスは、目を細めた。

ただでさえ暗い場所で一人のお茶会という状況下で、不穏な表情のアリスは実に不気味な存在と化す。

ケーキを一切れとると、そのまま後ろを振り返った。

「何か御用がおりかしら？」

不機嫌そうに眉を吊り上げて、吐息と共に言葉を吐き出す。いつの間にかアリスの後ろには滑稽な服装をした人物が立っており、阿呆のような表情を浮かべていた。

「いやはや、アリス。その物言いは何ですか？ 酷いですねえ」

その人物は表情を一変するとアリスが手に握っていたフォークを取り上げ、ケーキを口に入れた。

「人の食べ物を取るなんてお行儀が悪いですよチェシャ猫さん？」

チェシャ猫、と呼ばれたそれは面妖に表情を変化させるとフォークをテーブルに置く。被っていたシルクハットを手に持ち帰るとステッキを軽快に回しながら、述べる。

「いやはや、これまたお嬢さんに指摘を受けるとは。某、不覚を取りましたな」

アリスはケーキを食べる気が失せたのか、近くにあったティーポットを手に取り紅茶を注ぐ。今度はミルクを円を描いて投入しつつ、肩をすくめた。呆れた表情でチェシャを見上げ、ため息をつく。

とても面倒くさそうにチェシャ猫を凝視すると、ミルクティーを口に含んだ。

広がる魅惑の香りを堪能しつつ、仕方がないといった様子でチェシャ猫に話しかけた。

「御用は何かしら」

アリスの一言でチェシャ猫は何かを思い出したのか、手をたたいて目を見開く。

「いやはや、たいしたようではないのですがね」

「ならかえって頂戴」

彼が言葉を言い終わるか終わらないかの時にアリスは会話を打ち切るように言葉を吐き捨て、カップを受け皿に戻した。そして可愛らしい小皿に入れてあったクッキーに目をつけどれにするか吟味しつつ、雰囲気だけでチェシャ猫を拒絶する。

バターやチョコチップのクッキーが並ぶ中、彼女が手にしたのはマーブル。白と黒の二色が混ざり合い、混在するそれを小皿にとつて改めてチェシャを振り返った。

「それともお茶会のお相手をしてくれて？」

選んだクッキーをチェシャ猫に差し出しつつ、邪惡な笑みをこぼした。

相変わらず奇矯な振る舞いでチェシャ猫はそれを受け取った。

「いやはや、それでは是非とも」

丁度開いていたアリスの横の席に並びつつ、チェシャ猫は輕快に鼻歌を歌う。彼の行動に面食らったのか屈託とした様子で新たなクッキーを手にした。

アリスはたつぷりとシュガーの降りかけられたクッキーをほおばりながら、横目でチェシヤ猫を見た。

彼は何をするでもなく、ただ笑顔でアリスを笑っている。気味が悪いのか身震いして、息を吐き出した。

「いやはや、楽しいですなあ」

唐突に言い放つチェシヤ猫に痛い視線を浴びせた。

「私は全然楽しくないですよ。お相手してくるのではなくて？」
何枚かクッキーを食べ終わると、マカロンに目を留めた。黄色でピンクや緑のパステルカラーのそれを、輝かせた目で見つめて籠ごと手に取る。

「いやはや、それは失礼。アリスのお気に召すようなものとは難しいですな」

「何もしていないと思うのだけれども」

「いやはや、それもそうですなあ」

額に手を当てて哄笑するチェシヤを再度痛々しげに見て、無視した。

愛らしいマカロンを手にとって堪能するように眺める。

「やっぱりマカロンは美味しい……」

微笑を浮かべて柔らかく表情を崩すと、一気にマカロンを口にする。次々と彼女の胃袋に消えていく焼き菓子たちであるが、絶えることなくテーブルにおいてあり、なくなることとはなさそうであった。

薄暗い森でのお茶会。其処には一人の少女と面妖な男一人。会話は一切なく、ただただ時が流れていくという構図の中、アリスは黙々と茶菓子を食べていた。

白いティーブルクロスの上に並べられた数多ものお菓子。アリスが先ほどまでに食べた量などとは比べられないほど十分に残っていた。

袖のレースを揺らしつつ、チョコレートを取った。細かい細工が施され、どうにも彼女好みのように静かに嬌笑した。

チョコレートといえば種類はいくらでもあるのだが、とにかくアリスは今手にした1つが気に入ったらしく、食べ終えるたびに同じものを選ぶ。

それを見ていたチェシャ猫が、発言した。

「いやはや、アリス。同じものしか口にしないのですか」

言葉を受けアリスはきつい視線をチェシャ猫に送る。今現在手にしていたチョコレートを食べると、不機嫌そうに紅茶を注ぐ。

先ほどよりかなり乱雑で液体がテーブルクロスに幾つかしみをつけ、ティーポットを置く際にも重たい音が、響く。

大量にミルクを注ぎ、角砂糖を入れ。奇怪な音をならしてかき混ぜると、勢いよくカップを持ち上げた。

「いやはや、そこまで怒らずとも良いではありませんか」

「どなたが私を怒らせたのかしら」

鼻を鳴らして紅茶を口内に流し込むと、味わうという事をせずに飲み込む。

陶器が割れそうな勢いでカップを戻すと、イスから飛び降りる。ワンピースの裾が緩やかにゆれて、舞う。

小さな体でチェシヤ猫を見上げて失笑すると、口にした。

「楽しくないお茶会でしたこと」

飛び散った紅茶と、アリスを見ながらチェシヤ猫は眉をゆがめて笑いながら、これはどうもと言葉を返す。

アリスは身を翻すと道なき道を、歩く。草木が柔らかく踏みつけられ、小さな音を立てていた。

「アリスは、物語を作るのをあきらめましたとさ」

淡く少女が笑い、言う。途端、白い光が彼女を包み込みそして、森全体を包み込んだ。

強い光にチェシヤ猫は目を細め。今までにない表情——驚愕を貼り付けた。

光が消え去ったときにはアリスという存在が消え去り、三色の発光する玉があった。

それは、チェシヤ猫をあざ笑うかのように彼の周りを数回周り。

上空のかなたへと飛び去った。

「いやはや、アリスに分裂されるとは……。某が女王様に怒られまするな」

チェシヤ猫は残念そうに肩をすくめたが、その行動でさえ何処となく気だるげであった。ゆるりとステッキを振ると、一瞬にして並べられていたテーブルやイス、ティーセットが一式消え去る。

其処は周りの景色と同じものになり、何事もなかったかのように草木が鎮座していた。

ざわめく森を概観すると、緩んだ唇を引き締めてステッキを腕に下げた。シルクハットの位置を軽く調整しなおすと明らかに道がない場所を歩き始める。

耳障りな音を立て、木や枯葉を踏んでどこかに向かう。歩き方1つ彼は奇異であり、誰かが見ていれば憫笑することは間違いなかった。

音程など全く気にされていない鼻歌が木霊し、森を通り抜ける。

「いやはや、女王様に報告せねばなりませんねえ」

そういうとチェシヤ猫は軽く指を打ち鳴らす。

軽快な音が響き渡ると、音無く横にこれまた異様な格好をした男が現れた。

チェシヤ猫同様、シルクハットに燕尾服。ただ違うのは、純白であるという一点であった。

「何ですか」

彼は実に不機嫌そうな顔つきでチェシヤ猫を睨んだが、いつも通りのふざけている表情でかわされる。

「いやはや、【兎】相変わらずの早いご登場ですなあ。某歡心いたす」

「【兎】じゃなくてラビだ。いい加減覚えやがれボケ」

「いやはや、その口調は酷いですよ」

「チツ……用件を速く言え」

「いやはや、アリス同様君もせっかちですな」

「ああ？ あんな小ざかしい餓鬼と一緒にするな」

ラビと名乗ったその少年はチェシヤ猫を好いていないのか、今にも殴りかかりそうな勢いで言葉を吐き続ける。

一方チェシヤ猫は一切取り合うことなく、自分のペースで会話を続けてにこやかな笑みで静かにつけた。

「女王に、アリスが逃げたと伝えてくれればいいのです」

その声音はいつになく、冷たく、鋭かった。目も一瞬ではあったが凍て付いた事にラビは感づいたのか、舌打ちをしつつも頷いた。

煌びやかな玉座に腰掛けるはアリスと同等ぐらいの幼き少女であった。だが、華奢な体には美和ないほど大きなドレスを未にまとい、けばけばしく施された化粧が幼さよりも、国の長という事を主張していた。

次々と運び込まれる魅惑の香りの茶菓子や紅茶を床にたたきつけては、溜息をはき捨てる。

真つ赤なルージュの塗りたくられた唇を開き、一言。

「遅い」

女王らしからぬ不機嫌な声音で言うと、神経質に指先で手すりをたたいた。規則的に響く細かい音を耳に、家来たちは冷や汗を流しながら次のものを運び込む。たとえ国一と皆が口々に言うスイーツを運び込もうと、異国の有名な紅茶を出そうが彼女は捨て去る。いつまでも彼女を待たせるということは、首をはねられるという一点につながるのみ。

それを恐れ、震えの止まらない家来を横目に女王は再度嘆息した。

「あいつはまだなのか」

横に控えていた大臣に問いかけ、ティーカップを手にした。

「は。まだで御座います。今しばらくお待ちください」

彼の答えた言葉に、堪忍袋のおが切れたのか。紅茶を大臣に向かい、投げつける。

ゆつくりとティーカップが床に落ち、何度か跳ねると破片を撒き散らせて粉々になった。

悲鳴が幾つか上がり、慌てた家来たちが急いで女王に駆け寄る。

「お怪我はありませんか、女王様」

「お洋服は汚れておりませぬか、女王様」

「すぐお召し物の替えを」

走り回る彼女たちを手で制すと、鼻で笑った。

「よいのだ。それより、この責任を如何いたす」

高い天井にまで彼女の声は舞い上がり、反響した。青ざめた表情の大臣は床に顔を擦りつけ、わびていたが彼女が到底許す様子も無く。

ただただあざ笑うのみであった。

「皆のもの、笑うのじゃ。この阿呆めを晒うのじゃぞ。ハハハハハ」

けたたましい少女の笑いが響き渡り、続いて家来たちが小さく笑い出す。彼らにしてみれば、大臣は上司であり上司をあざ笑うなどという事は、到底許されない行為。

だが、女王が晒えと命令した故にしなければ自身の地位が危うい仕方なくそういった様子でだが嘲笑を向けて、横目で女王の様子を伺っていた。

笑いが収まると、女王が素早く立ち上がると軽快に足音を鳴らしつつ大臣の前に立った。

腕を組み蔑んだ表情で彼を見下し、口を開く。

「愚かじやのう」

「も、申し訳ありません……」

「こやつの首を、刎ねよ」

冷酷な声音で可愛らしい笑顔で少女は言い放つ。そばに控えていたトランプ兵の２人組みが、歩きたびに甲冑を鳴らしつつ大臣の腕を引つつかむ。

「や、止めてく、くださ、申し訳御座いませんでししいた」

「まだ喚くか。先に舌を切り取ってしまえ。はやくその耳障りな声を、消せ」

手を軽々しく振り払うと背を向けて女王は歩き出した。ドレスがゆれ杳然としていた、御付の召使が彼女のあとを追う。豪勢な扉が開かれ、恭しくトランプ兵が礼をした。

満足そうに彼女は笑顔を浮かべると、手を振って大広間を後にした。女王の後を追うように、断末魔の叫びが響き渡る。だが虚しくもそれが彼女の耳に届く前に扉は閉まり、優雅に廊下を歩いていった。

大きな窓から差し込む柔らかな光。真っ直ぐと伸びる赤い絨毯。突き当たりにある、歴代の国の長をかたどったステンドグラスからもれる七色の光。それはまさに女王が通るにふさわしい空間を作り上げていた。

そんな中、召使の一人がとてもものめずらしげに辺りを見ていた。それを上司の召使が叩いてしかり、少しばかり召使の間から苦笑が漏れた。

そのとき、女王が振り返る。慌てた表情で取り繕う召使たちに、淡い微笑を浮かべつつ少女は言った。

「そう慌てずとも良い。そのもの、今日から勤めだしたものよな？」

「あ、は、はい……」

「すっかりせぬか……。それより城に慣れていないと之から先おのずと支障はでるであろう。どうじゃ、童と一緒に場内めぐりなど」
年相応の花の様な明るい笑顔。その笑顔に一行は胸をなでおろすと同時、汗を流し始めた。微妙な沈黙が訪れたまま、ステンドグラスの在る場所までたどり着き女王が再度振り返る。

大きく広げられた腕に、彼女を照らす光。一回転して歯を見せて笑うと、先ほどの召使を覗き込んだ。

「どうじゃ？」

先ほどまでの横暴からは考えられないほどに、無邪気な声音。

女王の変貌振りに驚いたのか目を丸めて口を無意味に開閉させている召使を見て、彼女は悲しそうに目を伏せた。

一番年を食っている召使も目を細めて、息を吐く。

「驚かせたか、のう？」

「いえ……そのようなことは。ただ、私のような物が……恐れ多い事です」

「そのような事はないぞ。同じ釜の飯を食うものではないか、遠慮せずとも良い」

「ですが……」

「じれったいのう……。行こうではないか、皆の物もよいな？」

くすぐったい笑いを浮かべると小さな手でその召使の手をひいて、渡り廊下へと足を踏み入れた。

渡り廊下。城の西と東をつなぐ、少し狭い通路ではあるが狭いといえど、人がゆうに三人以上は通れる幅である。

小走りの女王と、それにひかれる一人の召使。とてもその無邪気な光景を他の召使たちがほほえましい表情で見つめていた。

「本当、彼女はお優しいのに……」

「男性にはお厳しい……」

苦笑交じりに吐き出された言葉に数人が頷き、綺麗な姿勢で前方を見据えた。

そこには後ろを振り返っている女王が手を大きく振って、
「何をして居るのじゃー？ はやくこぬかー？」

人の目を気にせず大声で叫ぶ姿があつた。

「少々お待ち下さいませ」

一番年の食った召使が声を返し上品にメイド服の裾を掴むと、小走りに彼女の元へ歩む。

数人分の走る音が響き渡り、女王が満足げに笑顔を浮かべた。大きくつないだ手を振り回し、楽しげに音程の気にされていない鼻歌を歌う。

「さあ、行こうではないか。東館、皆もあまり立ち入る事はなからう」

「そうですね。東館といえば、何が御座いましたか？」

「武器庫と死体安置室じゃ」

前方を示すと、少し低い声音で言った。

新人の召使の表情が若干強張つたのを見ると悪戯気に笑い声を漏らし、口を開く。

「嘘じゃ嘘じゃ。童たちの寝室ぞよ。そういえば、帥名前は？」

立ち止まり彼女の腹の辺りを差すと首を傾げてたずねた。

「あ、も、申し遅れました。レノア・フリーユゲルと申しますっ」

「フリーゲル……フリーゲル……ああ、童の一家と交流の深かった貴族の娘かいの？ 童は、アリディア・ローズ・ベイク。皆女王とよぶが、アリディアと呼ばれるほうが好みじゃ」

幼い手を新人の召使——レノアに向けて、一笑した。

レノアはその手を恭しくとると、一味違った笑みを浮かべて女王

——アリディアと共に歩き出す。

所々に花瓶が置かれ、赤い薔薇や百合の花が咲き誇っている。

舌足らずな口で一つ一つ説明を丁寧に行うアリディアは、とても楽しげで。男の家臣とすれ違った際に、暗い影を落とすという一転を除いては、普通の女の子である。

短めの通路を渡り終えると、今度は階段の手すりを持って体を回転させると逸楽の時をすごすように、人懐こい笑みを浮かべてレノアに抱きついた。

驚いた表情の彼女であったが、緩やかにアリディアの腕を振り解き手をつなく。

「アリディア様、これからどちらへ？」

落ち着いた声音でレノアがアリディアに問うと、当然のごとき顔で言い放つ。

「童の寝室じゃ」

長い階段を一段ずつ踏みしめて歩き踊り場で廻る。ドレスが花びらのように開き、彼女の回転にあわせて揺れる。

ヒールが心地よいステップを刻み、軽やかに少女は舞う。大仰に広げられた手が召使を呼び寄せ、寝室へと招く。

階段を一番上まで上がった先にあるのは、ただ1つの部屋。仰々しい扉が設置されて、開け放てば広がる甘い香り。

アリディアは真つ先に天蓋付きのベッドに向かうと羽毛の布団に顔を埋めた。軽そうな羽が何枚か飛び散り、空中を漂っていたがすぐに床へと落ちた。

彼女の自室もとい寝室は無駄に広くそして何も無かった。何も無

いということはないのだが、異常なまでに物数が少なく無機質。

現在アリディアが寝そべっているベッドに、二人用のテーブルとイス。小さな小物台に壁にかざられた、古い肖像画。一枚だけ新しいが、それはナイフか何かで切り裂かれて顔が見えない。

大きな窓のサンには一輪の花が飾られ、今にもしおれかけていた。それに目をつけた一人の召使が花 瓶ごともって、一旦部屋を後にする。

「レノアといったかのう？ 帥、童の遊び相手にならんかえ？」

「今、なんと……」

「じゃから、童の遊び相手になってくれと申して居るのじゃ。どうせ召使とて、毎日毎日洗濯して、給仕をして。童は退屈じゃ。誰か一人、ずっとそばに居るものがほしい」

哀愁を帯びた表情でレノアを見据えると、自虐的に微笑んだ。

「私などに勤まりますでしょうか……？」

「勤まるから言うておるのじゃ。どうじゃ？」

「アリディア様が宜しいのなら、喜んで」

その一言でアリディアの表情が一瞬で明るくなり、瞳に輝きが宿る。再びレノアに飛びつくと、笑った。

彼女にとって幸せな事だったのか。小さな至福のときを堪能していたのだが、刹那。

異様な雰囲気が部屋を包み込んだ。

誰しもが感じた、異質。

笑顔を消し去ると厳しい表情でアリディアが扉を睨む。そこには、白でみを固めた、ビットの姿があった。

ラビは不敵な笑顔でアリディアを見ると、鼻で軽く笑う。そして恭しくシルクハットを取り、一礼すると真っ直ぐと彼女へと向かう。

「何者じゃ、それ以上近づくな」

恐怖とも驚愕ともいえる表情で固まった召使をとがめることなく、レノアから離れると自らラビに向かっていった。

彼女の顔に宿っているのは、玉座に座っていた際の冷徹な仮面。

恐ろしい変貌ぶりに息を呑む者が数人。

張り詰めた空気の中ビットが困った顔で述べる。

「申し訳御座いません、アリディア様。私めは【兎】、チエシャ猫の使いにてやってまいりました」

アリディアの前で膝を突き、深く顔を沈めるとはつきりとした声で言い放った。目を細める彼女に対し、ビットは何をするでもなくただそれ以降は黙る。

「彼奴の使い、とな？ 証拠は」

今にも噛み付きそうな声音で問うと、ビットは顔を上げて懷から何かを取り出す。丁寧にアリディアにみせると、瞳の色を伺ってしまいこむ。

素早い動きではあったがそれが証拠だったのか。申し訳なさそうな表情のアリディアと立ち上がるビット。

アリディアは手招きすると、テーブルへと彼を誘った。

「悪いが、レノア以外は下がってくれぬかの」

丁度一人、召使が帰ってきていたが即座の状況判断で彼女は出て行く。それにつられるように、名指して呼び止められたレノア以外、早く部屋から退室した。

扉が閉まったことを確認すると、困りきった表情でアリディアが口を開く。

「おぬしは悪いやつでは無そうだが、悪い。男の顔を見ていると吐き気がするのじゃ」

目を伏せ長いまつげを揺らすと残念そうな声音で告げた。

面食らった相好で笑い声をビツトは上げると、失敬と一言のこし顔に手を当てた。

「なら、変えましょうか」

彼が手を横にそのままずらしたときにあつたのは、女性の顔。切れ長の目と、高い鼻。白い肌や綺麗な唇。先ほどのビツトとは明らかに違う女の顔が、そこにはあり。

妖艶な笑みを浮かべて細い指をアリディアに向けた。

「之でこれでしょうか？」

団栗眼の前で指先を回しつつ、ビツトは微笑む。その一方でアリ

ディアは啞然としたまま、固まっていたが首を振って朗笑した。

「魔法か。さて、チエシャ猫を待つて居ったのじゃが、まさか使いが来るとはな。それで、アリスはどうなった？」

つかれきつた様子で嘆息すると、首を横にしてビットに問いかけた。

城の鐘がいつもの如く刻限を告げ、高らかに音を響かせる。国中に響き渡っているであろう音を聞きながら、ビットは悔恨の表情で肩をすくめる。

「分裂して、消え去ったと」

最後の一言と同時に彼の声が部屋に浸透した。その一言が一体何を意味するのか、アリディアには察しがついたのか。汗をたらしながら立ち上がると、落ち着かない様子であった。イスの辺りを低回しつつ、口到手を当てて青ざめた表情で、何か言っていた。

彼女の呟きが誰に聞こえる事も無かったが、相当大変な事だという事は、レノアにもビットにも分かることであった。

アリディアは暫くの間低回していたが思い立った様子で、北側の窓を開け放つ。険しい表情で遠くを見つめていた。

外を漂っていた風が室内に一気に入り込むと、レースのカーテンをはためかせる。彼女の髪の毛が風に靡き、鬱陶しそうに押さえる。

壁にかけてあった肖像画などが音を立ててゆれる。それでも尚アリディアが気にした様子は無く、身を乗り出して更に見つめていた。

レノアが青ざめた表情で駆け寄ったが、気にせずに目を細め、

「破滅の森が、また広がったな」

低く、告げた。

苦笑をこぼすラビを見ると困りきった様子で窓を閉じると、イスにゆったりと腰掛けた。勢いよくテーブルに向かって伏せると、長い溜息を吐き出す。

「アリスが居ないと、国が壊れてしまう」

泣き出しそうな声が嗚咽と共に吐き出されたときには、【兎】の姿はすでに無く。いつの間にやら消えていた。

広い部屋で、一人。

レノアがいるが自分の世界に入り込み、少女は泣き崩れる。

彼女が泣いた理由とは簡単であり、国が壊れるから。アリスが居なければ、物語は成立しない。

つまり、物語の舞台が崩れるという事につながる。物語の舞台とは、この不思議の国。

長い年月が経つ間アリスは不思議の国と共に、物語の中と自覚しながらも住民たちは普通に、話を作り上げるためにただただ変わらぬ日々を過していた。だが、其処に終止符が打たれた。

数年前、アリディアの母親たるハートの女王が奇怪な行動に出た。彼女もすでに年老いて、気が狂っていたといわれているが、起こした理由は真相は闇の中。

それは午後の惨劇と呼ばれ、後に確実に語れる事となる、悲しい事件。

ハートの女王はアリスを茶会に呼び出し、毒殺しようとした。

当然ながら阿呆ではないアリスは丁重に断り、席を立とうとした際にトランプ兵から襲撃を受ける。白兎と帽子や、チェシャ猫の助も在り怪我は無かったが、それ以降心を閉ざし物語を作る事を止めた。

自分の空間——破滅の森を作り上げそこで過す日々を、始めたのであった。

それからすぐにハーとの女王は他界。幼きアリディアが女王となり、アリスの回復を勤めていたが、先代の手先である大臣たちが邪魔をする。

大臣は男達で、彼女は幼き頃からそのせいもあり男を異常なまでに毛嫌いする事となった。

アリスはアリディアの努力があり、友好関係は折角よいところまでいつていたらしいが、先日のお茶会にてそれは又、どんでん返しとなった。

国を守るためには、引きこもったアリスに物語を作ってもらわなければならない。

それが今、アリスが居なくなり不可能。

もはや絶望的であった。

「国が減びるのは時間の問題かのう」

テーブルからベッドに移動しつつアリディアはレノアに問いかけた。

* N O . 0 . 5 E N D

一章

* No. 01

曇り1つ無いきれいな大理石のタイルと壁。くすみ無く光り輝く天井。多彩な色の差し込むステンドグラスの窓は、一層に美しい。

その空間に、足音が響き渡る。

規則的に刻まれ続ける狂いの無いそれは何処か悲しさも秘めていた。

「嗚呼、世界が壊れる」

足音の主は立ち止まり、呟きを漏らす。

体格は華奢ながらも少年のもので、髪の毛は純白。揺らぐ瞳の色はルビーをそのまま嵌め込んだ様な、透き通った赤。頭にはシルクハットが載せられており、燕尾服を着込んでいる。握り締められた手の中には、錆び付いて到底動いていない懐中時計があつた。

彼は俗に【兎】と呼ばれるビット。

「探し出します、から」

ビットは一度深く目を閉じると、大きく息を吸って。そして吐き出し、また歩みを進めた。

先ほどよりも、力強く軽やかな音が響きわたる。

長い通路の突き当たりにはかなり大きい扉が存在した。漆黒をベースにし、あらゆる宝石で装飾が施された頑丈そうな扉。

そして途轍もなく巨大な錠前があり、鈍い光を放つ。

扉の前にビットは止まる。

懐から大量の鍵の付いた物を取り出し、そのうちの1つの鍵で開けようとしている。

「……………」

慣れない手つきで鍵が外される音が響くと、最後に盛大な音を立てて錠前が下に落とされた。

ビットは足元に転がった錠前を確認すると、力を込め扉を開け放つ。

「つつ……まぶし……………」

微かに目を細めると、シルクハットを前に少し倒す。

そして目の前に広がる【光】の空間へと、一步を踏み出した。

【光】の空間は、本当に光しかなかった。真っ白で、わずかに黄みを帯びている温かく、柔らかい光が充滿している空間。

【影】は一切無く、存在する事が許されていないようだった。そこに彼は立っている。

先ほどまで後方にあった建物は、いつしか消えてなくなっており彼の後方にも無駄に【光】が広がっているだけ。

ビットは黒が大目の服を身に纏っているが故、周りとのコントラストが凄かった。

【光】の中では彼は異物でしかなかったのか、空間自体が彼を拒絶するようにうねる。そのことを自覚してかビットは目を細めて口を開いた。

No. 01 - 2 -

「Я умоляла .
Open the road to please , put
out from the interstice of the
world .
Als Ausgleich , diese Erschei-
nung meine Seele zu sch?rfen .
Ако тя не се оплакват ! отворе
ни пътя .」

長い呟きがこぼれた。

その言葉はこの世界で使われている言語ではなく、そして一文ごと
に違う言語で。

「僕は行くよ……」

最後に世界の言語で述べる。

彼の言葉に呼応するように【光】が引き裂けの中から一筋の【影】
の道が生まれる。それは【光】を、ビットを飲み込むようにして
侵食をはじめ【影】を増やしていく。

だが。

彼の前に何者かが立ちただかる。

「何処に行く？ まさかあの餓鬼を探しに？」

けたたましい笑い声と共に吐き出された言葉。鋭い瞳でラビが、
ビットを見据える。

「君こそ何処に行くの？ 僕の邪魔をしないで。ラビ……そこを退いて」

とても歪な笑いで、周りの【影】を薄れさせているような雰囲気。整っているはずの顔立ちも笑顔1つで変化し、実に不気味である。

「ハハツ……。悪いな。別に邪魔しようと思ったわけじゃないからな。ただ、狭間が開いたから誰が許可無くあけたのかと思ってな」
「君も【兎】なんだから、あまりこの狭間の空間に來ない方がいいよ。結局は異物でしかないんだから」

彼に対する回答など一切せずに言葉を連ねる。ビットは永久に伸びる【影】の上を歩き、ラビとすれ違う瞬間。

微かに悲しそうな吐息を漏らす。

ラビはそれに気づいたのか、気づいてないのか。 彼とは反対方向に歩みを進め、口笛を吹き鳴らす。

「お互いに、楽しみだな」

ラビの異形とも言える声が、最後に。

微かに。

狭間の【光】に響きわたる。

影無き光は闇同然。ラビは充満する【光】の中で居心地よさそうに笑っていた。

空間を支配下にでも置いたのか、ビットが居たときとは違い【光】は彼を拒絶していない。

寧ろ受け入れるようで、淡く、柔らかくラビを包み込む。

「だから、ダメなんだよなあ」

シルクハットを取り若干乱れている髪の毛をいじって、嘆息する。前髪を押さえつけると再度シルクハットを被りなおし、ステッキをまわす。

滑らかな回転を見せるそれは器用にまわされ続ける。空気を静かに引き裂き、光を撒き散らした。輝くステッキを頭上へと放り投げると、華麗なステップで身を回転させると計算されたタイミングで、キャッチした。

「独りよがり、それは身を滅ぼす。分かっちゃ居ない」

踵をあわせて滑稽なほど、真っ直ぐに立つと大仰に手を広げる。

誰かに語りかけるわけでもなく、あくまで独り言として。

たえ聞かれていたとして、困る言葉でもないのか大きな独り言ではあったが。

ラビは体制を整えると【光】を引き裂いて、暗い闇に片足を踏み入れた。不規則な動作で手を動かすと、闇を広げて体を埋め込む。世界を切断するように一瞬にして闇が消え去り、【光】は当初と変わらぬ姿でそこにあった。

四方、何処までも広がり続ける【光】。それを闇と形容する方が正しいほどに、穢れを知らず。一転の影さえ無い中で、【光】が疑問をぶつけるように空間をねじらせた。

『ダレダ……』

『オマエハダレダ……』

声が、発せられた。それは明らかに【光】から生み出された、叫び。

誰も居ない中であつたが何か何か足りかけるように、【光】は声ならぬ声を出し続ける。

『コタエヨ』

無声音に近かつた声が、怒気を一気に含む。不思議に空間が引き裂かれて、動いた。

「いやはや、ばれてしまいましたか」

影も、形も。何も無かつたはずのその中にチエシヤ猫の奇怪な声が響き渡つた。一瞬にしてチエシヤ猫が居空間から現れた瞬間、【光】が彼を襲い掛かる。

それこそ怒りの標的が彼であるかのように。だが、チエシヤ猫は余裕綽々の表情で片手を降りかかる【光】にかざす。

『ナニヲスル……』

攻撃は、チエシヤ猫の数センチ手前で止んだ。

否。

否応無く止められた。彼の周りを薄い【影】が多い尽くして、【光】と真っ向からぶつかっている。甲高い耳障りな音が木霊する中、苦笑しながらチェシャ猫は手を振り払う。

爆風と共に激音が鳴り響き、【光】が消え去る。彼の周りには【影】だけが存在して、かなり離れた場所に悔しげに揺らめく【光】があった。

乾いた笑みを浮かべたままチェシャ猫は頭を振ると疲れたように、言葉を吐き出す。

言葉一つ出す事さえ面倒くさそうに、それでいて愉快そうに。

「いやはや、いきなり攻撃されても困りますよ」

手袋をつけたまま指を鳴らすと、周りから【影】を消し去り敵意が無い事を示した。不満げに波打つ【光】であったが、チェシャ猫に不穏なものを感じたのか何をするでもなく、平穏を取り戻す。それでも警戒心というものが拭えていないのか、【光】の核たる部分はチェシャ猫を避けているようだった。

彼は【光】の真意を知ってか、もったいぶる様に歩き始め蛇行しながらも核へと近づく。

『クルナ』

激しく拒絶をする核であったが、お構い無しの笑顔でチェシャ猫は接近していた。ステッキで床に当たる部分をつつきながら、爬虫類のような瞳で【光】を眺める。

再度空間が振れて【光】が移動をした。だが、それが何なのか。

チエシヤ猫は何食わぬ顔で手を伸ばすと核に触れた。

爆音と共に、紫電が迸った。

糸のようにチエシヤ猫の目が細められ、手が核の奥へと入れ込まれる。彼の手が進むにつれて放電の激しさは増し、手袋が焼け焦げていく。

対して【光】は必死の抵抗を見せ、空間を捻じ曲げる。それこそチエシヤ猫が立っていられないほど、物理法則などを無視して。だが無駄な足掻きでしかないのか、易々と彼の手が迫り来る。

彼の手が中心部に到達した瞬間、【光】が消えた。

蠟燭の火を一瞬して消し去ったかのように、辺りは闇と化す。

「いやはや、簡単でしたねえ。大丈夫ですよ、狭間の空間の位置をかえるだけですから」

『ハナ……セ』

「いやはや、大人しくしてください。さもないと」

チエシヤ猫は掌の上に載っている赤い種上のものを、指先でつまみ

「つぶします」

首を傾けて、愉快そうに告げた。

それが核なのか【光】が言葉を発する事は無く、チエシャ猫は一人頷いた。続いて無意味に高笑いをする、器用にステッキで孤を描きながらどこかへ歩いていった。

足音がなくなった際には、彼の気配消え去り。闇そのものも、無くなった。

「いやはや、それにしてもだね」

チエシャ猫は、無の空間で語りだした。言葉どおり、無。ほかに形容できる言葉は無いほどに何も無く、ただ、虚無の場所というのがただ広がっていた。

彼の声が静かに反響し、何重かに響き渡る。黒く澄み切ったその場所では、上下左右方向が分からないほどでチエシャ猫の姿が四方に映っている。故に、どれが本体かが区別がつかない。

「いやはや、簡単にも【光】が手に入るとは思わなかった」

それは核を小ばかにしているような声音。核は反抗するように、小さな種のような体を揺らす。

『ソレハコチラノイブンダヨ……。マサカダ』

核の声が反響し、チエシャ猫は肩をすくめる。お互い予想外ですね、と思っても居ない事を平然と口にする、歩き続ける。

若干焦げ臭い匂いが漂っていたが、それは自身の手袋から発せられるもの。

やっと、という表現が似合うほど時間が経った頃ではあったが、

チエシヤ猫は思い立ったのか、燕尾服の懷から新たな手袋を取り出した。赤い核を落とさないように持ち替えつつ、口で手袋を咥えてはめかえる。

何か言いたげに核が細かく振動したが、笑ってごまかすとチエシヤ猫は丁寧な手で包み込む。

「いやはや、君の抵抗はすさまじかったですね」

『ソウオモウナラ…… テブクロガコゲルティドニハナラナイダロウ』

「いやはや、そうでしょうか？ 予想外でしたから」

『ソレハワタシヲミクビツテイタノカ』

「いやはや、どうでしょうねえ」

ひょうきんな態度で核の言葉をかわすと、声を上げて笑う。不愉快だったのか核は手の中で大きくゆれ、僅かながら彼の掌を刺激する。

こそばゆい感覚が走り抜けたため、笑いを止めるときつく手を握り締めた。

うるさいです、と微笑をこぼしながら鋭い目つきで手の中を睨むと一気に落ち着いた。

チェシヤ猫が向かう先の辺りはしだいに開けていた。光は見えているが、一切入ってきていない。一定の場所から遮断され、無と有の世界を区別している。

彼が一步、有の世界へと踏み出した。それにより無が消えてなくなり、彼の背後に広がっていたはずの場所もただの森と化していた。

そこは最初にアリスがお茶会をしていた森。薄暗さは増し、不気味なまでに空気が重かった。

濃く広がる霧。上着に水滴をつけながらも突き進む。耳障りな鳥の声が響き渡り、続いて羽音が近くで立つ。

その鳥は飛び立ったのか、木の枝が僅かに振動していた。

「いやはや、こんな鳥いましたかな」

独り言と共に考え込むようにシルクハットへと手を当てるが、結局は思考をめぐらせていないのか。ほんの一瞬でその手は放されると、何事もなかったかのようにチェシヤ猫は歩き出す。

地面に落ちた小枝が、彼が歩きたびに音を立てて割れる。道ではなく、茂みに身を投じれば草と草が擦れあうおとが、静かな森に響く。

『ドコヘイク』

ふとした瞬間、今まで黙っていた核が語りだす。

「いやはや、何処でしょうか」

事知らぬ顔で答えると、薄ら笑いを浮かべる。端から見れば気味の悪いヤツではあったが、彼がそのようなことを気にすることは無い。

『ミズカラガシラスシテドウスル』

「いやはや、何処でもいいのですよ」

『ワケガワカラナイナ』

「いやはや、それは某もです」

軽快な音と共に額に手を当てると、哄笑する。
ひとしきり笑った後に唇を引き締めると、又無言で何処かへ歩む。

暫くの間、チェシャ猫は歩き回った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3810w/>

Monochrome lonely Wonderland

2011年12月19日21時45分発行